

# 高山

たかやま  
高山の原生林を守る会

会報 第 110 号  
2019年 10月



## 第 165 回自然観察会:講演会と新地町埤浜防災緑地観察会 伊賀和子

9月8日、久しぶりに皆様とご一緒させていただきました。今年は雨降りが多く、また、晴れれば猛暑。降っても晴れても、9月の海辺の観察会はきびしいだろうなと思っておりましたが、当日は抜けるような青空。しかも台風15号が数百キロメートル先まで近づいていたせいで、意外にも涼しい海風が吹きつけていました。

午前中は福島大学共生システム理工学類教授である黒沢高秀氏から、午後に予定されている観察地の震災前と後の地形の変化、それにつれて変化のあった植生について講義がありました。午後は、講義での知識を踏まえた観察会。震災後の復興工事として進められた新地町埤浜防災緑地公園と、松川浦県立自然公園に新たに設置された自然保護区域、保全区域が対象地でした。

埤浜は植物もまだ外来種が旺盛でしたが、そんな中、歩き始めて間もなくミズアオイが数株青い花を咲かせており、歓声があがりました。午前中に受けた講座の中でのミズアオイの花の構造をすぐに確認できてラッキーでした。帰りがけに通った公園の法面が、一面マツバギクでおおわれているのが見えました。松川浦ではまず保存地区の位置と範囲を確認。そこに生育する絶滅危惧のシバナ、オオシバナ、ハマサジ、ハマツナ、アキノミチヤナギなどを見ることが出来ました。この地点には昨年までオオシバナ4株の生育がありましたが、今年になって新たにシバナが数株芽生え、花も咲かせていたことが確認されました。



黒沢高秀教授の講演(震災による浜辺の地形と植生の変化について)



埤浜防災公園湿性緑地のミズアオイ

狭いながらも天然の植生が形になってゆきそうで、希望の象徴のような塩性湿地です。保全地区は県と国の面積を合わせるとかなり広大でうれしくなります。こちらでは潮の満ち干による水位の変化がもたらす植生も期待できる設計とのことです。

大津波は8年経った今も瞑目せずにはいられない多くの悲劇をもたらしました。しかし、自然の息吹は人間が作り替えてきた地形を一日にして覆し、そこにかつて生きていた植物たちの息吹までも取り戻したのです。季節がすすむにつれ、干拓される以前の植相が展開される光景に何度、目を瞠ったことでしょうか。緑の絨毯を敷き詰めたようなアズマツメクサの群落、県では絶滅したのではないかと思われていた数十年ぶりのウミミドリの大群生。蘇ったそれらの群落の多くは惜しくも復興工事の名のもとに、再び地下に埋め戻されました。せめて、手を加えないと約束をしたこの区域で、百年、二百年と天然の植生が歴史を重ねていくことを願っています。

震災後の復旧、復興工事を進めるにあたり保存地区、保全地区を残してくれるよう多大なご尽力をくださった黒沢先生はじめ関係各位に御礼申し上げます。(相馬市在住 伊賀和子)



埠浜防災緑地観察会(2019.9.8)



ウミミドリ(新地町 2016.5.18)



アズマツメクサ(新地町 2016.6.12)

## 土湯峠・新緑のブナ林観察会に参加して 吉田勝子

舗装道路の照り返しの道を歩き木漏れ日のブナ林に入ると 眩しくてしょぼしょぼしていた目がぱっちり開き 汗はす〜とひいて心地よい歩き。

ブナ林を歩きながら 自然林の階層構造は限られた光エネルギーを有効に利用するため 高さにより高木層、亜高木層、低木相、草木相、土壌層といった立体的な構造になっていることの説明を木々や草花を観察しながら「なるほど」と頷きながら歩く。

ブナ林の中歩きは土湯峠まで 土湯峠で喉を潤し鬼面山に向かう。ここからは安達太良火山の生い立ちの説明を聞きながらの登り。

安達太良山の形成は3期に分かれて形成され約55万年前頃に鬼面山の溶岩ドームや前ヶ岳東部が形成され、35万年前頃に前ヶ岳から和尚山にかけての山体が形成され20万年前頃僧悟台、薬師岳、勢至平、箕輪山が形成され、12万年前頃より小規模なマグマ噴出により鉄山から体内岩や船明神などの山頂部分が形成されたのです。目の前の鬼面山は確かに溶岩ドームの山容です。登山道もガレ場で歩きにくい。しかし箕輪山への登りは粘土質の登山道。そして大きな岩場の鉄山や胎内尾根。今まで安達太良山は変化があり魅力のある山と思って楽しんで登っていましたが 今回の観察会に参加し安達太良を見る目が変わりました。何十万年という長い時間をかけて鬼面山から前山への稜線が形成され最後に沼ノ平周辺の荒涼とした地形ができ安達太良山の景観のみどころが出来たのです。

観察会に参加させていただきたくさんの草花の名前を知ることができました。草花の名前が分かるようになると不思議と草花に愛着が出てきます。庭の雑草もだいたい名前が分かり草むしりも楽しくなりました。代表さんはじめ会員の皆様と楽しくお付き合いできたことに感謝いたします。長い間お世話になりました。ありがとうございました。



ブナ林の中歩き

## 秋は風邪を使う～季節と体3～

土井 昇

今夏は長梅雨後の異常高温で体調を崩した人が多かった。運動不足で食べ過ぎの人、汗を出し損ねた人、汗を冷やした人、、、。風邪を引き経過を全うして冬に備えたいが、秋をどうとらえて過ごせばいいのだろうか。

一日の気温差が大きくなると、身体は捻れてくる。適応のための捻れなので、落ち着けば元に戻るが、そうならない人が風邪を引く。うまく風邪を経過すると捻れが戻るので、風邪は調整作用と考えてよい。風邪も引けず捻れたまま頑張っていると、病気になってしまう。冬に不調を持ち越さないためには秋に風邪を引くこと。薬で安心し、ずぼらに過ごす大病になることもある。皮膚が縮んで、汗で出していた老廃物は泌尿器が受け持つため腎臓がくたびれてくる。冷えてくると体内に尿酸が増え、尿で処理し切れぬものは胃酸へと排物利用されて余計な食欲に化ける。

これを助けるのが足湯と身体の捻り運動。やや熱めの快い湯温で両足を温め8分を目安に足を拭く。足指先まで拭いて見比べ、赤くならない方の足を3～5分差し湯して温める。水をチビチビ飲むとなおよい。夜は寝汗をかいで冷やすことが多いので朝がお勧めだ。運動はふつう、夏は左に捻ると快く、秋になると右捻りも楽になってくる。右に捻れない人、捻るとつかえる人は何度か左にギュッと捻ってポンと力を抜き、一服したら右に捻ってみてほしい。自分の身体の感覚に向き合うことが大切なので、是非一つ一つの動きを味わいながら行ってほしい。

右に捻った時快く、息が深く吐けるようになれば、冬の身体へとスムーズに移っていく。



陽ざしを浴びるブナ林の黄葉

## 今年为天体ショーについて

林 和寛

今年为天体ショーの見どころは“夏の木星と土星”です。今年の木星、土星はともに夏を代表する星座であるサソリ座に輝いています。特に木星は夏の南の空にひととき明るくアンタレス近くに輝いているのですぐに見つけられると思います。

木星からは、探査機ジュノーが北極と南極の映像を送ってきました(ニュートン 2019年3月号参照)。木星は台風の嵐の惑星で、映像からは北極と南極も台風の嵐が吹き荒れている事が分かります。木星の台風の中で最も大きな台風が大赤斑と呼ばれるものです。地球の直径の3倍にもなる巨大な美しいオレンジ色をした台風でした。

実は私が星を望遠鏡で見はじめた小学生の頃、この大赤斑は大きくハッキリ見えました。ところが50年の月日を経た現在、この大赤斑は地球の直径の1.3倍ほどに小さくなり、非常に見づらくなってしまいました。

私は、もしかしたら50年の月日を経て、台風大赤斑の勢力がかげりつつあるのかもしれないと考えています。あと1000年もしたら消滅してしまうのでは?とも思ってしまうのです。

さて土星です。土星は大きな輪を持つ美しい惑星です。近年、その輪の質量が測定され、予想よりも軽かったとの報告がなされました。その結果、土星の輪は2億年ほど前に形成されたという考察が成されました。

アノマロカリスや三葉虫は輪の無い土星を見ていたのかもしれませんが。ティラノサウルスやアンモナイトは現在のよう美しい輪を持った土星を見ていたのかもしれませんが。

夏の星空を仰ぎながら星に願いをこめてみてくださいね。



星座

本稿は、前号に掲載すべき内容でしたが、紙面の都合で掲載できませんでした。筆者および会員の皆様にお詫び申し上げます。

ふるさとの山に向かいて 言ふことなし

ふるさとの山は ありがたきかな (啄木)

私のふるさとの山は丹沢山塊です。高い山はありませんが魅力的な山ばかりです。

アサッテから合宿だという前々日の木曜日、数学の教師に職員室に呼ばれ、土曜日特別にお前たちのために再試をしてやると言われた。こりゃありがたい三教科ある数学のうち数二と幾何の二教科が赤点、山岳部の仲間たちに話すと「お前そりゃ落第するぞ、三学期に挽回する自信はあるのか、ねえんだろ？」と脅された。自分の中では、留年は真っ平、せっかく先生がチャンスをくれたのだから山岳部の合宿どころではないと、心は決まっていたのだが、そこは若さ、ちょっとかっこをつけて、みんなの前で一応迷ってみせた。皆もそこは分かっている、今回は山に行かないで試験を受けると予定調和、わざとらしく私を説得してくれた。そこで「よし分かった今回は、山は諦めて、試験に専念する」と素直に言えばそれでよかったものを、またまたここでもかっこをつけて、「それじゃ試験を受けてから遅れて出発する」と口走ってしまった。本当は行きたくはなかったのだが……。という訳で土曜日の放課後に再試験を受け、皆から二時間遅れて、ひとり山に向かうことになった。

何という名の町だか村だか忘れたが、丹沢山塊の麓の小さな集落のバス停に着くと、バスの乗客は私ただ一人、辺りはもうすっかり日も落ち空は薄暗くなりかけていた。秋の夕暮れは短くて空はすぐに暗くなる、道は一本道この道をただ進めばよい。気が付けば晩秋の月が煌々と静かに白く夜空にひかり、道の小石をキラキラ輝かせている。トラックが一台走れるだけの幅の林道が、一人黙って歩く私を N 沢の出会いのテント場へと導いてくれている。

私は懐中電灯をザックのポケットに用意していたが、取り出す気は起こらなかった。林道の両側に植林された杉の木は、黒く行儀よく並び、光と暗黒との境界の壁をつくり、奥にある漆黒のブナ原生林の森を覆い隠している。この林道に寄り添って沢が走っているはずだが、沢の水音は森の闇に吸い込まれてしまったのかまったく聞こえてこない。そんな静寂の中でフクロウ(?)の声だけが、まるで道案内の様に、ある一定の間隔で「ボーッ、ポッボーッ」と聞こえてくる。白と黒の世界、中間色の全くない世界の中で、月が「お前を空から見下ろしているぞ」と私に気づかせるかのように、クッキリと私の影法師を小石の光る地面に載せている。その影と一緒にトボトボとテント場へと向かって歩いた。

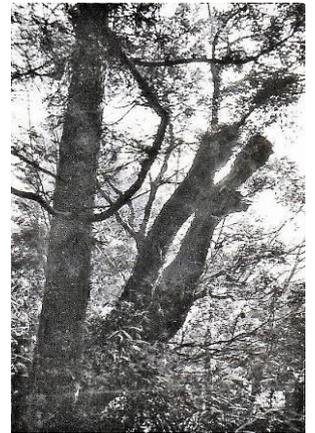
この林道の尽きた所の沢への入口の広場にテントを設営しているはずだ、随分遅くなってしまった。やがて一時間半も歩いた道の先に、オレンジ色に明かりが灯った二張りのテントが見えてきた。私はテントの前まで来ると、「こんばんは、こんばんは」と小さく籠った声で呼びかけた。すると一瞬テントの中の談笑が止み、今度は中から「どなたさんですか？」という声が出た。「私は N 沢のタヌキです、腹が減ってペコペコですどうか飯を恵んでやってください」と言うと、テントの中から「おいポンポコ、再試はどうだった」と続けて返事が返ってきた。この言葉に私は白と黒だけの幻想の世界から現実の世界に引き戻されてしまった。まるで絵の中のような美しい夢幻の月夜の林道のひとり歩きのすべてが、幻と化してしまったかのように。

テントに入ると、「オイ、怖くなかったか、気味悪くなかったか、タヌキに化かされなかったか」と、矢継ぎ早に皆からの質問攻めにあった。その時の自分はその夜の経験を他人に話すのがもったいなく、話してしまうと、自分の中の特別な世界のはなしが、つまらない現実のはなしとなってしまうようで、「うんタヌキには、化かされなかったみたいだ」と答えるだけにした。

月の光に照らされて独り歩いた林道は、怖くはなく、不気味でもなく、そこはまるで異次元の世界に入り込んだかのような、半世紀以上前のチョット不思議な空間だった。



丹沢山塊



白と黒の世界



岳友

9月8日(日)に新地町農村生活改善センター視聴覚室において、福島大学共生システム理工学類教授・黒沢高秀先生の講演会を開催しました。演題は「津波による浜辺植生の変化と復旧事業における湿地再生への取り組み」です。また、講演会後には埴浜防災緑地公園湿地観察会と松川浦植生保護地を観察しました。

この講演会や埴浜防災緑地湿地観察会を開催するに当たって、私は6月初めに新地町役場復興推進室に行きました。講演会の施設を借りたり、広報「新地」にお知らせを掲載してもらいたいと思ったからです。埴浜防災緑地に、植生保護のための湿地があることを新地町民はほとんど知りません。あそこに湿地がある意味を、ぜひ町民の皆さんに知ってもらいたいと思いました。復興推進室の係の方に大変親切に対応していただき、話は順調に進みました。イベント後援申請書の「後援を必要とする理由・期待する効果」の欄に黒沢先生の資料を参考にして次のように書きました。

～東日本大震災の生態系への影響は「被害」として語られることも多いが、人により失われた海岸の湿地や干潟が再生した一面もあった。新地町でもウミドリやミズアオイなど、震災前には見られなかった希少種の生育が確認された。復旧・復興工事では海岸の環境が大きく変化し、絶滅危惧種の生育地を含む多数の海岸植生が既に消失しているが、新地町では工事の際に生態系への配慮が行われ、2ヘクタールの湿地が復元されている。新地町民が講演を聴いたり、埴浜防災緑地湿地の植物を観察することで、植生保護の意義について理解を深めることができると思われる～

先日、講演会に参加していた友人に感想を聞く機会がありました。友人は、なぜ田んぼの向こう側に草ボウボウの湿地があるのだろうと不思議に思っていたと言っていました。講演会を聴いて、あそこに湿地がある意味が分かったし、福島の海岸はテトラポットに埋め尽くされて、自然海岸がないのね。そう言えば、昔は浜の方にはガマとヨシが繁っていたよねとも話していました。わずか2ヘクタールですが、ここには浦であったこの土地本来の姿があります。

この湿地は3月に工事が終了しました。気になって時々見に来ていましたが、大型重機が行ったり来たりしてまるで工事現場でした。湿地がこれで復元するのだろうか、内心は心配でした。昨年、黒沢先生にそのことを尋ねたら、地面を海面と同じくらい掘り下げれば大丈夫でしょうという返事でした。なるほど、今年6月にはコウキヤガラが

群生していました。種子というものは強いものですね。環境が合い、除草剤をまかなければすぐ出てきます。

埴浜防災緑地湿地観察会ではミズアオイも確認されました。聞けばすぐ答えてくれる黒沢先生のもと、有意義な観察会ができました。

多様な植生が身近にあってこそ、豊かな自然があると言えるでしょう。ここに来ると小鳥のさえずりがチッチチッとします。エサがあり、隠れる場所があるからでしょう。

そんなことにも気付きました。

(2019/09/27 記)



埴浜防災緑地公園の湿地は2カ所



道路左側は湿地で右側は田んぼ



松川浦保全地区を観察



松川浦保全地区のハマサジ群落

# 東北ブナ紀行（70）

奥田 博

東北にはブナの名山が各県に分布しています。しかし全国の県単位でブナの名山を眺めると、新潟県が圧倒的に多いと思う。その新潟県と接する山形県境・福島県境付近には、質の高いブナ帯が広がる。今回紹介の二つの山と峠は、新潟県境の小国町にあり、小国町のキャッチコピーは「白い森の国」。

## 105) 百石山 599m

百石山に棲み悪事を働くオオワシを征伐した若者に殿さまが百石を授けたという昔話が伝わる。山形と新潟を結ぶJR米坂線の無人駅伊佐領駅から歩き出す。小学校跡地が登山道入口で小さな駐車場になっている。スギ植林地を過ぎると自然林を歩くのは、どこの低山も同じ。沢に沿って咲くキクザキイチゲやオオタチツボスミレの群落を眺めながら登る。沢から離れると、突然急坂に変わる。この急坂は、山頂から延びる尾根まで続く。ブナを眺める余裕もなくフクラハギが痛くなる頃、尾根にたどり着いた。

ここからは緩いブナの尾根をたどるが、丁度ユキツバキの花が見頃で赤が目立つ。ブナの新緑とユキツバキの濃い緑葉に赤い花は、森に映えた。  
コースタイム: 登山口(1時間30分)尾根(30分)山頂(1時間30分)登山口



## 106) 黒沢峠 424m

今から約 500 年前に置賜地方から越後へと通じる街道として、伊達14代の植宗(たねむね)によって大里峠が開かれた。後年、街道には13の峠があるため「十三峠」と呼ばれた。その一つが黒沢峠で、現在も石畳の道が残っており、街道脇にはブナ林が広がる貴重な道である。

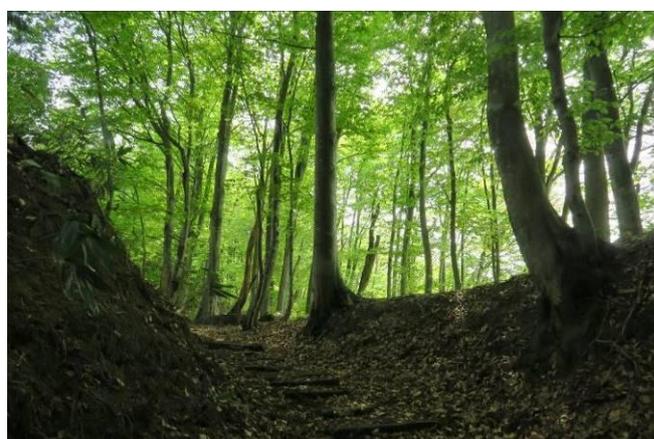
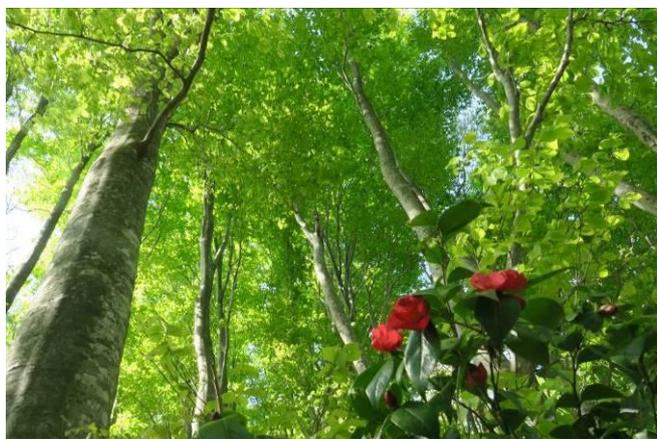


登山口には立派な看板と小屋が建ち、広い駐車場があるが、お祭り広場と記されておりイベントでも行うのだろうか。道に入ると直ぐに石畳が現れる。大きな石畳は残っており、道は切り開かれたことが分かる造作だ。スギの人工林も見られるが、ブナの自然林が広がる谷も見られる。緩やかに登ると、次々とブナが現れる。途中、古屋敷と呼ばれる広場からは、真白な飯豊連峰が間近に眺められた。

黒沢峠からは、市野々への下り道を見送り471mピークに登える。山頂はブナ二次林に

覆われて展望はない。ここから北西に伸びる道を下るが、ここはもっと原始的なブナ林が広がっていた。こちらモユキツバキが見頃、それにイワウチワが足元に広がって彩りを加えていた。

コースタイム: 登山口(60分)黒沢峠(10分)471ピーク(50分)登山口



ブナ林では丁度ユキツバキの赤い花盛りだった(百石山) 登山口から断続的ではあるが、黒沢峠まで石畳の道が続く(黒沢峠)

## ツリガネニンジン (*Adenophora triphylla* var. *japonica* キキョウ科ツリガネニンジン属)

吾妻・安達太良連峰の沢沿いや明るい草地に植生する多年草。尾根沿いでも砂礫が多く水はけの良いところで個体が見られる。別名トトキ。「トト」は筒を意味し、朝鮮語に由来するという。若い茎葉は山菜として利用される。茎葉からは白い乳液が分泌する。属名の *Adenophora* は、ギリシャ語で腺を有するとの意味で、茎や葉に乳液を出す腺細胞があることが語源とされている。古書では里の道端でも普通に見られると記されているが、今では、それなりの山に登らないと見ることはできない。近縁種にフクシマシャジン、ハクサンシャジンがある。

葉は輪生で根出葉は長柄を持ち、ほぼ円形。茎葉は長楕円形または披針形で先は尖り、緑に不規則な鋸歯がある。葉身中央に太い葉脈が走る。茎葉は 3~4 枚ずつ輪生する。茎葉に毛がある。

花は頂生、茎の上部に、円錐花序を伸ばし、数段連続して長い花柄を持つ釣鐘型の合弁花を数個輪生または互生する。花は下段から咲き昇る。花冠の先は5片に分かれ、先端部が反転する。雄しべは5個、葯の色は黄色。雌しべは1個で柱頭は紫色で成熟すると3裂する。花柱は長く花冠から突き出る。開葯しても柱頭が裂開していないことから雄ずい先熟とみられる。花冠の色は白から紫色で個体によって色合いは様々である。ガクは披針形で鋸歯がある。フクシマシャジンは鋸歯が無く全縁であることで区別される。同様の識別はヒメシャジンとミヤマシャジンでも適用される。高山性のハクサンシャジンとの区別性は不明瞭である。

ツリガネニンジンに会津の山に登っていた頃に、何気なく山に咲く花として覚えていたが、その印象を強くしたのは吾妻連峰の草原で大群落に遭遇した時である。草丈の高い植物なので単独でも目立つのだが、釣鐘状の花を着けた数十本の花茎が風に揺られる様は颯爽としていて心地よく、時の経過を忘れてしまうほどであった。花を着けた姿は長身の麗人である。ツリガネニンジンの英名は Ladybells。日本での変種であるこの花への命名の由来を知りたいものである。本種は変異が多いので、それを探するのも楽しい。



裂片が 6 通常は 5

## オゼミズギク (*Inula ciliaris* var. *glandulosa* キク科オグルマ属)

吾妻連峰の湿原に植生する多年草。日本固有種であるミズギクの変種。同属のオグルマ、キオン属に属するサワオグルマなどは花の外見が似ているが、吾妻山域では本種の植生地が最も標高が高い。

葉は互生。根生葉と茎葉を着生する。茎葉の着生は少ない。茎は暗赤紫色。分岐せず直立する。茎や葉には長い軟毛がある。茎葉はやや厚みがあり、葉形は卵状披針形またはへら状。先は尖る個体と尖らない個体があるようで茎葉は個体差があるのかもしれない。基部は茎を抱く。葉縁は滑らかで、葉全体に長い軟毛が密生する。茎の中部から先の茎葉の裏には腺点が多く分布することでミズギクと識別する。根生葉はロゼット状の全縁へら形で開花期まで枯れない。オグルマは根生葉が開花期までに枯れるが、茎葉は大型で多く着生する。

花は頂生。根生葉から花茎を直立し、頭花を 1 個着生する。オグルマは花茎が分岐する。頭花の外周は雌性の舌状花が 1 列に並び、内側は多数の両性の管状花がボタン状に密生する。雄しべは 5 本。葯は合着し、花柱を囲む。雌しべの柱頭は 2 つに分岐する。雄ずい先熟。

就職したその年に登った飯豊山でウサギギクに出会った。ウサギギクの頭花は大きく華やかであった。その印象が強く、高山に咲くタンポポの様な花といえばウサギギクという固定観念が定着していた。その後、茂庭山系の沢源頭部のキンコウカの群落が発達した湿原でウサギギクに似た花に遭遇した。当時は、山岳の植物について特にこだわりがあったわけではなかったため、その花の名前を調べることもなくそのまま記憶のダンスに収められた。それから数年が経過し、本格的に吾妻連峰の植生調査に専念する中で、本種の群落に遭遇し、吾妻連峰にはオゼミズギクが生育していることを初めて知った。その後、山麓では、サワオグルマにも出会った。しかし、オゼミズギクの母種であるミズギクはまだ見たことが無い。ミズギクは山地の湿原等に植生していると解説書には記載されているのだが…。ツリガネニンジンとハクサンシャジンと似たような関係にあるのかもしれない。



## 第166回自然観察会案内：霊山・湧水の里自然林観察会

日時：2019年10月27日（日）7:30～15:30

集合場所 小鳥の森第一駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20名

内容 霊山北部の湧水の里を起点に日枝神社奥宮まで、晩秋の自然林を散策します。散策後は恒例の芋煮会です。

準備するもの 昼食、食器、登山靴・長靴等、雨具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳  
\*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)、申し込み：10月25日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

## 第167回自然観察会案内：城山・里山の陽だまり観察会と総会

日時：2019年11月24日（日）7:30～16:00

集合場所 福島市信夫支所テニスコート脇広場 集合時間 7:30

(集合場所が分からない方は幹事へご相談ください)

参加定員 20名、総会は定員なし

総会会場 鳥川集会所

内容 大森・城山山麓の自然林を散策します。散策後は総会です。

準備するもの 昼食、食器、登山靴・長靴等、雨具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

\*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)、申し込み：11月23日(金)まで佐藤守

(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。



## ブラジル紀行 パンタナールの自然



カベセイラベントゴメス湾の湿性地 牧場内の蟻塚（固化した土壌を改良する） 野焼きされた森の異様な景観

アマゾン熱帯林の広大な規模の焼失が国際問題を引き起こす中、9月17日から20日までマットグロッソ州パンタナール地方を訪れた。パンタナールは州都クイアバ南部のベント・ゴメス川流域に広がる湿地帯である。クイアバから約100km南下したポコネーから自然保護区となっている。その中心部を走る州道60号線の両側に開かれた牧場にはホテルが併設され、エコツーリズムの拠点になっている。現在では牧場主により牧場内に残された自然や鳥類等の生態系保全が図られているが、その牧場は広大なシェハード(サバンナ)の森を焼き払い開拓された歴史を持つ。パンタナールは森林破壊と自然保護が混沌とした地帯ともいえる。

州道60号線沿線では下草管理の手法として野焼きが実施され、牧場では乾季に野焼きを行い、雨季に再生した下草が放牧牛の飼料として利用される。今年の乾季は無降雨日が100日以上続いたという。クイアバ空港から外に出ると辺りには焦げ臭いにおいが漂っていた。(記 佐藤守)

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第110号 2019年10月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・小幡